

## 記憶と前未来

—林京子「祭りの場」と「長い時間をかけた人間の経験」をつないで—

岩川 ありさ

### 要旨

本論文では、林京子「祭りの場」（「群像」一九七五年六月号）と「長い時間をかけた人間の経験」（「群像」一九九九年一〇月号）という二つのテキストをつなぎ、一九四五年八月九日に長崎で被爆したという出来事の記憶が、時を経て、いかに想起され、いかに語り直されるのかについて、精神的外傷と記憶との関わりから論じる。一九七五年に発表された「祭りの場」の冒頭はアメリカの科学者たちが寄せた「降伏勧告書」の引用からはじまるが、「祭りの場」においてはこの部分に大幅な省略がなされている。けれども、一九九九年になって発表された「長い時間をかけた人間の経験」においては、省略部分が復元して記されている。核時代において、いかにして省略部分が重要な意味を持って書き添えられたのか。林京子のふたつのテキストを対象にして、近年のジュディス・バトラーの議論を参照しながら、核時代における生の条件の編成のされかたについて検討することで、他者として規定してきた人々の生がまっとうされる未来の可能性について展望したい。

**キーワード：**記憶、精神的外傷、核時代の文学、ジュディス・バトラー、前未来

### 1. はじめに

本論文では、林京子「祭りの場」（「群像」一九七五年六月号）と「長い時間をかけた人間の経験」（「群像」一九九九年一〇月号）という二つのテキストをつなぎ、ある人を捉えて離さない記憶が、時を経ていかに想起され、いかに語り直されるのかについて、精神的外傷と記憶の関わりから論じる。まず、「祭りの場」における記憶の問題について、テキスト冒頭の記述を中心に検討した後、「祭りの場」という小説を引用しながら展開する「長い時間をかけた人間の経験」の分析を行う。その上で、近年のジュディス・バトラーの議論を参照しながら、危機的な状況にあって、「嘆かれるに値する生」と「嘆かれるに値しない生」とにふりわける枠組みがいかにして機能しているのかに注目し、核時代における生の条件の編成のされかたについて検討し、今現在の「わたしたち」が置かれている状況について整理し、「傷つきやすい生」を生きる人々が、互いの傷つきやすさ

へと応答し、責任を負いながら、共に生きる未来の可能性について展望したい。

まずは、林京子の履歴について紹介してから、「祭りの場」の冒頭の分析を行う。

## 2. 記憶の空白―「祭りの場」冒頭をめぐる

林京子は、一九三〇年（昭和五）年、長崎県長崎市に生まれた作家である。生まれてまもなく、父の上海赴任のために林一家は上海に移住した。上海での経験は、その後、「ミッシェルの口紅」（一九七五年）、「上海」（一九八三年）、「三界の家」（一九八四年）などの「上海もの」と呼ばれる作品に結実する。けれども、林が、繰り返し描いてきたのは、一九四五年（昭和二〇）年八月九日、長崎で被爆した経験である。一九四五年二月、戦局悪化によって、父をのぞく一家で帰国した後、林は、長崎市内にある長崎高等女学校に通っていたが、八月九日、動員先の三菱兵器大橋工場において勤務中に被爆した。林自身が、エッセイや小説の中で繰り返し書いているとおり、このとき、彼女は原爆投下という未曾有の出来事を奇跡的に生き延びたのである。林は、同人雑誌『文芸首都』に発表した「閃光の夏」（一九六四）、「その時」（一九六五）、「曇り日の行進」（一九六七）などの作品によって文学者として出発し、一九七五年四月に「祭りの場」で群像新人文学賞を受賞、同年七月に同作品で芥川賞を得てからも、「一被爆者」として八月九日を描くという姿勢を貫いている。

「祭りの場」は、長崎において被爆した「県立N高女」の女学生である「私」を中心にした物語でありながら、複雑な記憶の伝達回路を持った小説である。「祭りの場」の冒頭は、「昭和二〇年八月九日」に、「東大嵯峨根教授」が米国留学中に科学仲間だった三人のアメリカ人の科学者たちが観測用ゾンデによって送った「降伏勧告書」という「書翰」の引用からはじまる。まずは、冒頭の部分を引用し、「祭りの場」において、被爆の時点の記憶がどのように描かれているのかについて検討したい。

昭和二〇年八月九日

長崎市に投下された原子爆弾の爆圧などを観測する、観測用ゾンデの中に、東大嵯峨根教授名あての降伏勧告書が入っていた。嵯峨根教授が米国時代の三人の科学者仲間が送った勧告書である。

「ヒロシマナガサキ原爆展」に掲載されている書翰には、

嵯峨根教授へ

米国原子爆弾司令本部

一九四五年八月九日嵯峨根氏米国滞在当時の三人の科学者仲間より（林 1988: 9）<sup>2</sup>

小説の冒頭には、「昭和二〇年八月九日」という日付が記され、原爆投下が起こった時

点を示しており、このときの被爆経験は、その後も語り手の「私」をとらえて放さない。語り手の「私」は、原子爆弾投下のさなか、長崎県の長崎市内という土地にいて、ほかの人々の多くが死した出来事を生き延びた。けれども、一九四五年八月九日十一時二分の長崎原爆投下の時点のことを、語り手の「私」ははっきりとは記憶してはおらず、その全貌は曖昧なままだ。

突然急降下か急上昇か、大空をかきむしる爆音がした。空襲！ 女が叫んだ。物音を聞いたのはそれだけである。文字にすれば原爆投下の一瞬はたったこれだけで終わる。ピカもドンもない。秒速三六〇米の爆風も知らない。気づいたら倒壊家屋の下にいた。(林 1988: 25) [傍点引用者]

「気づいたら」という言葉が示すように、「一被爆者」である語り手の「私」は、自らの身に何が起こったのか、瞬時には把握できないまま、七三、八八九人が即死し、七四、九〇九人の人々が「いなばの白兎」のように「真夏の日照りの中で皮をはがれた」、原爆投下の時点を生き延びる。そして、自分の身に何が起こったのか、そしてまた、長崎にその時点で何が起こったのかについて全貌を把握できないまま、それからの人生を生きて行かざるをえないのである。しかし、こうして、「記憶の空白」を抱えているからこそ、「祭りの場」というテキストの冒頭は引用ではじまっているのではないだろうか。

衝撃的な出来事について、他の人々の証言や歴史的な資料によってしか、自らが置かれていた状況について知ることができないという、「記憶の空白」があるからこそ、語り手の「私」は、自らを決定的に捉えて離さず、同時に、自分では知りえなかった出来事の記憶について、記録や証言によって確かめていく作業を行うのである。「祭りの場」という小説における記憶の伝達回路が複数の資料によって担われていることは、このような「記憶の空白」と関係しており、精神的外傷となった記憶を描くテキストの特異性を示している。

テキストの中で、「ヒロシマナガサキ原爆展に掲載されている」と記されている「降伏勧告書」は、一九七〇（昭和四五）年、朝日新聞東京本社企画部が編纂した『ヒロシマ・ナガサキ原爆展』のことで、朝日新聞社から実際に刊行されている<sup>3</sup>。語り手の「私」は、「歴史の証言」として一九七〇年に編まれた図録『ヒロシマ・ナガサキ原爆展』を参照することによって、被爆の時点に生じた「記憶の空白」を埋め、失われた記憶を手繰り寄せようとする。被爆という出来事は、何よりも、被爆者である語り手の「私」の身体に放射能によって起こる症状を生じさせ、彼女を捉えて離さない。それと同時に、語り手の「私」は、精神的にも深い傷を負っている。そのため、「被爆者」である語り手の「私」は、この「降伏勧告書」において、「日本国がただちに降伏しなければそのときは原爆の雨が怒りのうちにますます激しくなるであろう」という記述を含む文章を平静には読む

ことはできないのである。しかし、語り手の「私」は、平静に読むことができない「歴史の証言」を読むよりほかに自らの記憶を再現できない。彼女は、『ヒロシマナガサキ原爆展』をはじめとして、事後的に編纂された歴史的な記録を読み込む中で見えてきた「一九四五年八月九日」の姿を媒介として、自らの記憶を確かめなおすのである<sup>4</sup>。

視界はほとんどきかなかつた、と同書にある。他の記録を読むと八月九日、風なくおだやかな日、となっている。更に被爆者の、二、三日の日記にも晴、あるいは快晴とある。

私の記憶は暑く、晴れていた。地上が曇るほど厚い雲の層ではなかった。(林 1988: 11)〔傍点引用者〕

語り手の「私」は、自分の記憶を「他の記録」によって補いながら、一九四五年八月九日の出来事を手探りする。その意味では、「他の記録」が導く記憶を媒介にすることによって、この小説の語りは成立しているといってもよいだろう。しかし、「祭りの場」は、長崎への原爆投下と被爆経験について証言する小説として高い評価を受ける一方、「他の記録」を参照する点について、小説の語り方や描き方をめぐって評価がわかれてきた<sup>5</sup>。特に、歴史資料を引用してはじまる冒頭のテキストの記憶の語り方を含めて、発表当時の時評によって批判されたのは次の二点である。

①十四歳の体験と三十年を経た四十四歳の作者の観察とが混同した記述が見られ、誰がどの立場から語っているのか判然としない箇所がある。(「芥川賞」選評・永井龍男)

②記憶と現実を新たに再編するために、冒頭の「ヒロシマナガサキ原爆展」に掲載されている書簡や「長崎医大原子爆弾救護報告」書などの資料が挿入されることで、資料に頼ってしまったため、文学としての効果が薄くなる。(「群像」選評・井上光晴)

これらの指摘は、まさに、「記憶の空白」をどのように埋めていくのか、そして、どのように記憶を想起するのかという問題と関わっているだろう。原子爆弾が落とされた直後、語り手の「私」は、全壊したA課の建物の下から何とか逃げ出し、放射能による下痢や吐き気に苛まれながら、「N高女」へとたどり着き、生き延びる。そして、戦争が終わった後も、放射能の恐怖に怯えながら過ごし、周囲の人々が死す別離の経験をする。

その経験は、確かに、原子爆弾投下の前後のことなのだが、語り手の「私」は、一九七〇年一〇月一〇日の朝日新聞の記事について挿入したり、ところどころに、息子の話を織り交ぜたりしながら、語りの現時の出来事を挿入することで、被爆という経験を

後々になって語りなおしていることを明らかにする。つまり、語りの現在時において想起した記憶は、かつて捉え損なった出来事を捉え直す試みであることが明示されるのである。その意味で、「祭りの場」というテキストは、その意味をきちんと捉えることができなかつたがゆえに、衝撃的な出来事を生き延びた者のもとへと繰り返し回帰する、精神的・外傷的な記憶が持つメカニズムによって、八月九日の被爆において生じた「傷」自体を指し示そうとしているといえるのではないだろうか<sup>6</sup>。

当初捉えることができなかつた出来事を捉え直す試みは、精神的・外傷となる経験を生き延びた者のもとへと回帰し続け、把握し損なつたがゆえに、空白を埋めていくしかない状態をつくりだす。従って、「祭りの場」への批判として、十四歳の体験と三十年を経た四十四歳の作者の観察とが混同した記述が見られ、記憶と現実を新たに再編するために歴史的な資料が多用されることがあげられたことは、逆説的に、精神的・外傷となった出来事の記憶を埋める作業を行う語りの特質を捉えているといえるのではないか。つまり、「祭りの場」という小説の冒頭では、すでに、この小説全体の構造を支えている、その出来事が起こった時点では把握できなかった経験を捉え直すために他者の証言や歴史資料を引用するという「一被爆者」の視線から八月九日を再構成しようとする試みがはじまっているのである<sup>7</sup>。

### 3. 想起される過去—「長い時間をかけた人間の経験」

しかし、八月九日についての記憶の想起は一度では終わらない。「祭りの場」の冒頭に引用された「降伏勧告書」は、「群像」一九九九年一〇月号に発表された「長い時間をかけた人間の経験」においても、再度、作中に引用され、二十四年の時を経て検証を加える作業が行われている。

二十四年前の一九七五年『祭りの場』と題した小説を、私は書いた。一九四五年、昭和二十年の、長崎の被爆状況を綴った文章である。女学校三年生の夏から、三十年が経っていた。書き出しに、炸裂時の爆圧などを観測するためにB29から落とされた「観測用ゾンデ」の中に入っていた降伏勧告書」を、私は引用している。『ヒロシマ・ナガサキ原爆展』——朝日新聞本社企画部編集——から、再度、書き写してみよう（林 2005a: 27）

「長い時間をかけた人間の経験」作中に引用された『ヒロシマ・ナガサキ原爆展』の「降伏勧告書」と、「祭りの場」の冒頭で引用された「ヒロシマナガサキ原爆展」の「降伏勧告書」の二つを比べてみれば、大きな違いがあることがわかる。その違いについて検討するために、まずは「祭りの場」の冒頭に引用された「降伏勧告書」を見てみよう。

「われわれは貴台が立派な原子物理学者として、もし日本国がこの戦争を続けるならば、日本国民は重大な結果に遭遇し、苦しまなければならないだろうということを、日本帝国参謀本部に悟らせるために努力されるよう、個人的にこの書翰をおくるものであります。

(中略)

この三週間のうちに米国の砂ぼく地帯で最初の爆発実験が行われ、一つは日本の広島に投下され、さらに第三番目の原子爆弾が今朝投下されました。われわれは貴台がこれらの事実を日本国の指導者たちに認め、悟らせるよう努力され、そしてもし戦争がなお続けられるならば、貴国の全都市の破滅と生命の浪費を中止するために貴台が全力を尽くされるようお願いするものであります。科学者としてわれわれの美しい発見がこのように使用されたことを残念に思うものであります。しかし、日本国がただちに降伏しなければそのときは原爆の雨が怒りのうちにますます激しくなるであろうということをはっきり申上げるものであります」(林 1988: 9-10)

一九七五年の「祭りの場」執筆の時点では、「中略」とされた部分が、「長い時間をかけた人間の経験」においては復元されている。作中には、『祭りの場』では次の“貴台”以下“疑いませぬ”までを略(林 2005a: 27)と記されており、その省略された部分は次のようなものだ<sup>8</sup>。

貴台はこの数年来国家が必要な資材のための巨額の費用を支払う用意があるならば原子爆弾はたやすく造られるということをご存知であります。米国では(原爆などの)生産工場が現在すでに建設されていることを貴台がご存知である以上、昼夜二四時間働きつづけているこれらの工場から造られるすべての生産物は貴台の国に炸裂するであろうことを疑いませぬ。(林 2005a: 27-28)。

一九七五年の時点では省略した部分を、一九九九年の時点では再び書き写したのは何故だろうか。「長い時間をかけた人間の経験」というテキストの冒頭には、「一九九九年・世紀末の春に」と記されており、「一九九九年」という年が記されている。そして、テキストの後半には、一九九八年十一月、国連軍縮長崎会議が長崎市内で開催されたという事実と、原爆資料館を訪問したという「パキスタン外務省軍縮担当局長」の「シャバス氏」の言葉が引用されている。

「あの時に何があったかよく分かった。あつてはならないこと。インドが核を持ったので私たちも自衛のために持たざるを得なかったが、インドとパキスタン両国は政策を変えなければならない。」(林 2005a: 82)

語り手の「私」は、「あの時に何があったのか」、そして、「その後何が起きているか」を問いながら、「シャバス氏」の言葉を引用するのだが、長い時間をかけた経験によって、一九七五年の時点では省略した部分が、一九九九年の、核兵器をめぐる世界的な状況の中では深い意味を持って現れ、省略することができなくなる。テキストには、この小説の「進行中」に、「コソボ地区」の空爆に劣化ウラン弾が使用されたことが記されているが、その記述は、NATOの多国籍軍がコソボ紛争に際して約三万発の劣化ウラン弾を用いたという現実の記憶を呼び起こす。そして同時に、その記憶は、遡って、一九九一年の湾岸戦争で、アメリカ軍がイラク軍に対して劣化ウラン弾を使用したというかつての記憶と接続され、「米国では（原爆などの）生産工場が現在すでに建設されていることを貴台がご存知である以上、昼夜二四時間働きつづけているこれらの工場から造られるすべての生産物は貴台の国に炸裂するであろうことを疑いません」（林 2005a: 27-28）という箇所を読み飛ばせなくなる。つまり、かつて省略された箇所こそ、世界中が、「（原爆などの）生産工場が現在すでに建設されていること」を知っているという事実をすでに証言しているのだ。

「長い時間をかけた人間の経験」の語り手の「私」は、「祭りの場」を書いた作者でもあることが小説の中には示されているが、長崎で女子高生の時代を過ごした友人たちの訃報は届き続け、被爆経験者が高齢になる「世紀末」において、想起される過去の意味あいが変わっていくということを経験的に味わう。ウランという物質によって核兵器は造られ、原子力発電が行われるということが同時に進行する中で、語り手の「私」は、十四歳で被爆してからの五十四年間を生き、そして、小説家として二十四年間を過ごしてきた。「長い時間をかけた人間の経験」で、「祭りの場」の冒頭を引用し直す作業は、捉え損ねた八月九日の出来事を何度でも呼び起こし、未来へと伝達するための回路を開くために、省略していた言葉を改めて発見する作業を作者に促したのではないだろうか<sup>9</sup>。

一九九九年の時点で、林京子が「長い時間をかけた人間の経験」を書いたことについて、渡邊澄子とスリアーノ・マヌエラは、二〇〇一年一月十九日『東京新聞』夕刊の林のエッセイ「新世紀を迎えて」を参照しながら、「長い時間をかけて放射を続ける、低線量放射能と人の健康」をめぐる問題が世界規模で進行していることが、「長い時間をかけた人間の経験」の問題意識の根底にあると指摘している（渡邊・マヌエラ 2010）。一九四五年に原子爆弾が投下されて以来、スリーマイル島やチェルノブイリの原発事故を経て、核時代を生きているという意識が林の中にはあり、被爆時点から逆行して、より一層、核に支配されていく世界の中で、いかにして未来に希望を見出すのか、「もう一度原子爆弾が落ちなければ人類は目覚めないでしょう」という反語をもってしてしかいえない状況において、林は、かつては省略した「昼夜二四時間働きつづけているこれらの工場」のイメージをなお強く想起したのではないだろうか。そして、省略されていた言葉

を引用し直すことによって、「長い時間をかけた人間の経験」という小説は、過去において示されていた未来への懸念を喚起しているのである。

#### 4. 前未来という時制

最後に、私たちが、三・一一以降に林京子の文学を読む意味について、近年のジュディス・バトラーの議論を参照しながら、前未来という時制を手がかりにして考察したい。

一九九九年九月三〇日の東海村 JOC の臨界事故が起こった日、林京子は、一九四五年七月一六日に世界ではじめて原子爆弾の爆発実験が行われたニューメキシコ州にあるトリニティサイトを訪れていた。林は、臨界事故のニュースを聞くと、八月六日と八月九日から今日まで、被爆国として歩んだ経験は何も生かされていないのだろうかと思ったという（林 2003: 110）。けれども、その後でトリニティを訪れる経験をすることによって、人間が最初の核の被害者だと思っていたが、実際には、トリニティサイトという荒野で、人間よりも先に、大地やそこに生きていた生物たちが死したのだということが骨身にしみて感じられたという（林 2003: 112-113）。その経験を経て、林は「祭りの場」から持っていた「視点」を変更していくのである。

今まで『祭りの場』からずっと八月九日を書いてきましたが、視点を人間中心に置いてきました。けれども、トリニティに行きましてから、『トリニティからトリニティへ』という作品を書くときに、自分の視点をどこにおいていいのか、本当に珍しく迷いました。六日、九日の視点がぐっと下がったような気がするのです。人間が超えてはならない域を超えてしまったということ、本当に重い課題を人は抱え込んでしまったという気がしております。（林 2003: 113）

林の言葉は、ある経験をした後、決定的に文学テキストの意味あいが変わってしまうということを示唆する。それと同時に、核という「重い課題」を人は抱え込んでしまったという事実は変わらないで継承されてゆくことをも、彼女の言葉は示している。はじめに被爆した草木や生物たちを荒野の中に見出したトリニティでの経験と、それでもやはり残り続ける「重い課題」、つまり、核と原子力の問題は、二十世紀を経て、二十一世紀になっても、危機として反復され続けている。一九五四年の第五福竜丸の被爆、一九七九年のスリーマイル島の原発事故、一九八六年のチェルノブイリ原発事故、一九九九年の東海村 JOC の臨界事故、そして、二〇一一年の福島原発事故。こうした核をめぐる歴史的な出来事は現在も起こり続け、核時代は継続されているのである<sup>10</sup>。「祭りの場」と「長い時間をかけた人間の経験」には、「われわれは貴台が立派な原子物理学者として、もし日本国がこの戦争を続けるならば、日本国民は重大な結果に遭遇し、苦しまなければならない」という共通した言葉が引用されているが、まさしく、「われわれ(アメリカ)」

と「貴台（日本）」の力学を示したこの言葉こそ、核時代において、あらゆる場面で、誰の生は生きるに値し、誰の生は生きるに値しないのかという、生をめぐる枠組みが設定されている現実をあらわしているのである。

ジュディス・バトラーは、『戦争の枠組み』の中で、九・一一以降の危機的な戦時下において、「生はいつ嘆きうるものであるのか」という問題を提起したが、その中で、「われわれ」という連帯をつくるために、「われわれ」に入らないものを規定することによって、「死しても嘆かれぬ存在」を産出していく過程があることを明らかにしている（バトラー 2012: 54）。バトラーが指摘するように、「われわれ」と「あなた」という二項対立の力学によって、「嘆くべき生」を峻別しようとする枠組みは、第二次世界大戦を終わらせた原子爆弾投下においては、広島と長崎の人々に危機を配分した。その後、日本では米軍基地の編成において、あるいは、原子力政策において、より多く危機を配分し、他者化した地方に危機を担わせてきたということが、三・一一においては露骨なかたちで顕わになった。けれども、憶えておくべきは、三・一一をめぐる危機の配分は、すでに戦後の原子力政策をはじめとして、三・一一以前から続いており、私たちは、戦後の原子力政策によって、危機をも相続してきたということである。

実際に、林京子の仕事を紐解いてみると、根底に響いているのは、核による危機が世界中に張りめぐらされた世界をわたしたちは生きているという認識である。例えば、一九七九年の時点で、スリーマイル島の原発事故を受けた林は、テレビニュースでスリーマイル島の母親と手を繋いでいる子どもたちの様子を見ながら、三十四年前、疎開先の諫早から迎えにきてくれた母とのやりとりを思い出して、次のように述懐する。

長崎で被爆した私を、疎開先の諫早から迎えにきた母は、どこまで逃げればいいのかだろうね、と独り言をいった。夜が明ける前の、薄闇の道を被爆者に混じって逃げながら、無意識に出た実感だったのだろう。テレビの前で私もあの日の母と同じ言葉をつぶやいていた。

本当に、どこまで逃げればいいのかだろう。そして世界じゅうが核物質で汚染されつつある今日を、どこまで逃げろというのだろうか。（林 1979: 114）

「どこまで逃げればいいのかだろうね」という言葉は、三・一一以降にも繰り返された言葉ではなかっただろうか。一九七九年に描かれた一九四五年の母子の会話に強く刻まれたひとつの言葉が、時を経て、繰り返されている危機について物語る。そして、死を与えてもよい「貴台」と、死を与える側にいる「われわれ」という不均衡な枠組みは未だに機能し続け、現在進行形の危機は差し迫っている。では、この不均衡をいかにして改善していけるのか。とりわけ、バトラーが、前未来という概念を用いて次のように説明している言葉に耳を傾ける必要があるのかもしれない。

わたしたちは、子供が望まれているとき、その生は寿がれて始まる、と考える。しかし、その子の生が悲嘆可能であるという了解、つまり、その子の生は失われれば悲嘆をもたらすものであり、そういう前未来形がその子の生の条件として設定されているのだ、という暗黙の了解がなければ、生を祝うこともありえない。通常の言語では、悲嘆はすでに生きられた生に対して向けられたものであり、すでに終わってしまった生を前提としている。しかし、前未来形に従うならば（それ自体も通常の言語に含まれるわけであるが）、悲嘆可能性は、生がはじまり維持されるための条件となる。今まさに生きられはじめたばかりの生のはじまりの点において、「ひとつの生が生きられた」という前未来形が前提されるのである。言いかえれば、「この生は、将来において、すでに生きられた生となるだろう」というのが、悲嘆可能な生の前提条件であり、それはつまり、この生は生として尊重され／みなされ、その尊重によって維持されるだろう、ということなのだ。（バトラー 2011: 26）

嵯峨根教授個人を指しながらも、実質は、「貴国」における「あなたたち」を指し示す「貴台」という言葉は、悲嘆されない生として、長崎という土地に住む人びと、そして日本に住む人びとを規定する言葉だ。そして、この「われわれ」と「貴台」の枠組みは、その後も継承され、生命の危機を与えることができる「われわれ」と、一方的に生命の危機を配分される「貴台」とを峻別する枠組みとして機能していく。ヒロシマ、ナガサキ、フクシマを繋いで、そしてまた、八月六日、九日から、三・一一を繋いで考えるべきは、再度、「貴台」として他者の位置に見据えてきた人々の存在まで含めて悲嘆する可能性を見出すことはできないかということではないだろうか。生命が失われたら悲しいということ、人は傷つきやすいということに立ち戻ることはできないだろうか。すでに歴史の中で、その生が失われてしまっは悲しいという地点から物語りはじめた文学テキストは数多くあり、戦争文学というべき系譜の中には、他者として見過ごされてきた生が未来においてまっとうされる可能性もまた描かれてきた。そして、そのような未来の可能性が描かれていることこそが、核時代における文学の希望なのではないだろうか。

## 5. おわりに

二〇一一年三月十一日に東日本大震災が起こった後、一年以上の時を経ても、私たちはその出来事について言い表す言葉を充分には見出してはいない。けれども、確かに、私たちの前には福島原発の危機的な状況は迫っていて、核と原子力の脅威は身近にある。林京子という作家が、一生をかけて核への警鐘を鳴らし続けたその仕事を、私たちは果たして継承してきたのだろうか。本論文において試みたことは、精神的外傷となっている記憶を捉え直す試みを続ける林京子という作家の小説テキストを分析することである。

しかし、同時に、核時代において、私たち人文科学の研究者は、人間が生み出した原子力という脅威に対して、いかなる態度をとっていくのかについて問うべき問いがあることは書き添えておくべきだろう。

エドワード・サイードは、『人文学と批評の使命』の中で、人間がつくった歴史の中で犯した過ちは人間がその歴史の中で贖わなければならないと指摘するが、まさしく、歴史を再検討し、現在のあり方や未来を変容させるための視座をえることでしか、核時代における文学者の使命はまっとうされないのではないだろうか。サイードは、『人文学と批評の使命』の中で次のように述べている。

わたしが思う人文主義とは、わたしたち自身の沈黙や死すべき運命と闘いながら、テキストから流用や抵抗といった現実化された場へ、伝達へ、読むことと解釈へ、プライベートからパブリックへ、沈黙から解説や発言へ、またその逆へと移動するための、そしてことばの空間と、身体空間や社会空間におけるそのさまざまな起源や戦略的展開とのあいだで、最終的に二律背反的で対抗的な分析をおこなうための手段であり、おそらくわたしたちがそのためにもつ自覚のことである——こうしたことは世界中で起こっている。日々の生活や歴史や希望を足場にして、そして知識と正義を、おそらくは解放をも求めることを足場にして（サイード 2006: 104）

サイードが述べるように、私たちは、林京子という文学者のテキストを足場にして、あらゆる生がその生をまっとうできる未来の可能性へと向けて、言語的な行為を行う必要があるのではないだろうか。核時代を生きるということが再び問われる時代において、いかなる議論へと開いていけるのか、そして、核に抵抗するための文学テキストをいかにして継承していけるのか。私たちは、恐らく、過去と未来から見つめる無数の眼に晒されながら、現在を生きているのだ。

## 註

- <sup>1</sup> 本論文は、二〇一二年五月二九日に、東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻の授業「言語態分析演習Ⅲ」（小森陽一先生）において行った口頭発表をもとにしている。
- <sup>2</sup> 以下、本発表では、林京子『祭りの場／ギヤマン ビードロ』（講談社文芸文庫、1988）より引用する。
- <sup>3</sup> 一九七〇年七月二日から一〇月一八日まで高崎市など全国九都市で展示された写真などの図版を収めた八四頁の本である。
- <sup>4</sup> エッセイ「瞬間の記憶」の中で、林は、「祭りの場」で描いたのと同じ原爆投下直後のことを次のように記述している。「炸裂時の閃光、熱線、爆風、どれも記憶にない。一瞬の記憶はかすかな爆音と、続いて聞いた急降下か、急上昇する、飛行機の轟音である。その直後に、原子

爆弾は炸裂したのだと思う。気付いたとき——意識を失っていたかどうかは確かでないが——私は闇のなかにうずくまっていた」(林 2005b: 238)。この箇所、林は、机の下に避難する、一、二秒のあいだの出来事であったにもかかわらず、その後も、「みもしない、感じもしない閃光」を肉体に感じることもあるという。また、同じエッセイの中で、八月九日の原子爆弾投下時に受けた恐怖を無意識的に回避した経験や、再体験した経験についても触れている。

5 「群像」(一九七五年六月号)の「群像新人賞選評」において、埴谷雄高が、「長崎での原爆の記録」を十分に描いた重みのある作品として高く評価し、第七十二回芥川賞においては、大岡昇平が、「十四歳の頃に被曝した少女が、三十年の時を経て、その体験を小説に結実させたこと」を評価し、「記録によって体験を検証して、この世紀の悲惨事が記録されることの意味」を探る小説としている。詳しくは、内海宏隆「林京子『祭りの場』論—序説—」(『芸術至上主義文学』2000年11月)参照。

6 人文・社会科学の分野にトラウマという視座を持ち込んだキャシー・カルース(Cathy Caruth)は、『トラウマ・歴史・物語』(下河辺美知子訳、みすず書房、2005)の中で、「トラウマという現象」を、「病理/病状」としてのみ捉えるのではなく、「外に向けて叫び声をする場であり、それ以外の方法では伝えることのできない現象や真実をわれわれに語ろうとする試みそのもの」(カルース 2005: 7)として捉え直す見方を提示した。カルースによると、トラウマは、恐ろしい出来事があったために起こるのではなく、その意味をきちんと捉えることができなかつたがゆえに、衝撃的な出来事を生き延びた者のもとへと繰り返し回帰するという特性を持っているという。当初捉えることができなかつた出来事を捉え直す試みは、「悪夢」や「反復強迫的行為」として、姿かたちを変えながら、外傷的な経験を生き延びた者のもとへと回帰し続ける。

7 トラウマと書くことについては、川村湊との対談「20世紀から21世紀へ—原爆・ポストコロニアル文学を視点として」(『社会文学』2001年6月)において、林京子自身が語っている。

8 以下、林京子『長い時間をかけた人間の経験』(講談社文芸文庫、2005)より引用する。

9 『座談会昭和文学史五』(林・松下・井上・小森 2004)において、林京子は、長崎総科大学の学生たちとともに、原子爆弾投下直後、「祭りの場」において一四歳の語り手の「私」が逃げた道を辿り直した経験に触れ、その当時の記憶について確かめ直す必要が出たことに触れている。この座談会の中では、記憶の語り方についても詳しく言及されている。

10 一九四五年に国際連合が発足してからはじめに着手した仕事は、第二次世界大戦後の〈原子力管理〉と〈軍縮〉であったが、それにもかかわらず、冷戦下において、軍備拡大が続いた。一九五三年一月八日、国連総会でアイゼンハワー大統領が、「原子力平和利用」について演説をしたが、その翌年、ビキニ環礁において、アメリカは水爆の実験を行い、第五福竜丸の乗組員たちが被曝した。そうした核軍備競争において、アメリカとソ連という二つの大国をはじめとして、核を抑止力とする動きは続いたが、それと平行するかたちで、日本では原子力平和利用が喧伝されるようになる。一九五四年には、原子力発電開発の計画が日本でも法律案とし

て提出され、一九六六年、東海村において日本で初めての原子力発電所が稼働する。その後、日本には五十四基の原発がつくられ、新聞社をはじめとする大手のメディアによる原子力平和利用の喧伝も行われた。

## 参考文献一覧

- 朝日新聞東京本社企画部（編）. 1970. 『ヒロシマ・ナガサキ原爆展』 朝日新聞社.
- 内海宏隆. 2000. 「林京子『祭りの場』論—序説—」『芸術至上主義文学』 26, 111-125.
- 大岡昇平・永井龍男他. 1982. 「第七十三回芥川賞選評」『芥川賞全集 10』 文藝春秋社, 428-436.
- 井上光晴・埴谷雄高他. 1975. 「第十八回群像新人文賞選評」『群像』 30 (6) , 16-22.
- カルース, キャッシー. (Caruth, Cathy) . 2005. 下河辺美知子（訳）『トラウマ・歴史・物語』 みすず書房.
- サイド, エドワード. (Said, Edward W.) . 2006. 村山敏勝・三宅敦子（訳）『人文学と批評の使命—デモクラシーのために』 岩波書店.
- バトラー, ジュディス. (Butler Judith) . 2012. 清水晶子（訳）『戦争の枠組み—生はいつ嘆きうるものであるのか』 筑摩書房.
- 林京子. 1975. 林京子「祭りの場」『群像』 30(6), 24-60.
- . 1979. 「何処まで逃げればいいのだろうか」『文化評論』 220, 113-115.
- . 1988. 『祭りの場／ギヤマン ビードロ』 講談社文芸文庫.
- . 1999. 「長い時間をかけた人間の経験」『群像』 54(11), 6-67.
- . 2003. 「グランド・ゼロに立って〔講演〕」『日本近代文学』 68. 108-117.
- . 2005a. 『長い時間をかけた人間の経験』 講談社文芸文庫.
- . 2005b. 『林京子全集 7 自然を恋う・瞬間の記憶』 日本図書センター.
- 林京子・川村湊. 2001. 「〔対談〕 20世紀から21世紀へ—原爆・ポストコロニアル文学を視点として」『社会文学』 15, 4-20.
- 林京子・松下博文・井上ひさし・小森陽一. 2004. 「原爆文学とオキナワ文学—「沈黙」を語る言葉」井上ひさし・小森陽一（編）『座談会昭和文学史 五』 集英社, 9-105.
- 田中利幸・ピーター・カズニック. 2011. 『原発とヒロシマ「原子力平和利用」の真相』 岩波ブックレット.
- 渡邊澄子・スリアーノ・マヌエラ. 2010. 『林京子 人と文学』 勉誠出版.

